

身体的魅力ステレオタイプにおける個人差の検討

小野寺孝義 (社会心理学)
三浦 正樹 (教育心理学) *

問 題

これまでの身体的魅力に関する研究は、魅力のステレオタイプがきわめて強力なものであることを示してきた。身体的に魅力的な女性はより、優しく、親切で、寛大と見なされがちである。一方、身体的に魅力がない女性は女らしさに欠け、男性的であるとみなされる傾向があった (小野寺 1989、Onodera and Miura 1990)。このようなステレオタイプは美人ステレオタイプと呼ばれる。しかしながら、どのような人がより強く身体的魅力の影響を強く受け、どのような人があまり影響を受けないのかという個人差については十分な吟味が行われていない。

本研究ではフェミニズム尺度で測定される個人差が身体的魅力ステレオタイプ認知とどのようにかわるかを検討した。フェミニズム尺度を取りあげたのは1) 日本におけるフェミニズム尺度作成の報告があること、2) フェミニストの運動の中に美人コンテストなどに対する批判が含まれていることの2つによる。前者の尺度の報告は鈴木 (1987) によるものであった。後者の事実からは、もしフェミニズム傾向が強ければ身体的魅力に影響を強く受けることを意識的に避けるのではないかと考えた。従って、フェミニズム傾向が強い個人は身体的魅力ステレオタイプに影響される程度が少なく、一方、フェミニズム傾向が弱い個人は身体的魅力ステレオタイプに影響された他者認知をすると仮定した。

さらに、対人認知において相手の身体的魅力に敏感に反応する個人が、相手の性格特性についても同様に敏感に反応するかを検討した。言い換えれば、他者を判断する場合に、相手の美しさに、より敏感に反応する個人と、あまり美しさについて反応をしない個人では相手の性格判断にどのような違いが生じるかを検討したものである。

方 法

被験者は短大生・大学生で男性162名、女性206名の計368名。いずれも心理学の講義の受講生であった。はじめにフェミニズム尺度を実施した。これには鈴木 (1987) によるもので、本来は(1)結婚観、(2)教育観、(3)職業観、(4)平等・自立の意識、の四つの観点に対応する四十項目からなっていた。本研究ではそれぞれの観点について鈴木 (1987) の報告で最も因子負荷が高いとされたものを三つずつ選び、計十二項目に絞って測定を行った。尺度は(1)まったくそう思わない～(5)非常にそう思う、までの5段階であった。具体的な項目は以下に示すとおりである。なお、○は逆転項目である。

1) 結婚観

- 家事は男女の共同作業となるべきである。
- 女性の居るべき場所は家庭であり、男性の居るべき場所は職場である。
- 主婦が仕事を持つと、家庭の負担が重くなるのでよくない。

2) 教育観

- 娘は将来主婦に、息子は職業人になることを想定して育てるべきである。
- 男の子は男らしく、女の子は女らしく育てることが非常に大切である。
- 常に家庭に居て子育てに専念する母親だけが理想の母親であるとは限らない。

3) 職業観

- 女性の人生において、妻であり母であることも大事だが、仕事をすることもそれと同じくらい重要である。
- 女性は家事や育児をしなければならないから、フルタイムで働くよりパートタイムで働いた方がよい。
- 女性は子どもが生まれても、仕事を続けたほうがよい。

4) 平等・自立の意識

- 男性と平等になるために、女性が自立の意識をもって地位向上をめざすべきである。
- 女性も、仕事を通して自己実現や人間としての成長をめざすべきだ。
- 家庭や社会で、男女平等の権利と義務をもっと強調すべきだ。

次にフェミニズム尺度の調査とは別な調査であるとの体裁で六枚の人物写真を被験者に提示し、性格を含めた特性を推定するように求めた。写真だけというわずかな手がかりを基にどれほど正確に相手の性格を見抜くことができるかを調べることがここでの調査目的であると被験者には説明された。被験者が写真を見る順序はランダムになるように工夫されていた。具体的には人物写真は封筒にまとめてランダムな順で入れてあり、被験者には写真は必ず上にあるものから順に評定していくよう教示されていた。六枚の人物写真は皆女性で、プリテストにおいて最も身体的に魅力的と認知された写真三枚（高魅力人物刺激）と最も身体的に魅力がないと認知された写真三枚（低魅力人物刺激）からなっ

ていた。また、写真は白黒で肩から上の顔のみが正面から写っており、メガネやアクセサリーの類は着けていないものであった。被験者に評価を求めた性格特性は(1)親切さ、(2)自信、(3)積極性、(4)明朗さ、(5)意志の強さ、(6)女らしさ、(7)やさしさの七項目である。各項目は7段階尺度で評定するよう被験者に求めた。これらの項目はこれまでの研究の中で美人ステレオタイプを強く反映する項目であることがわかっているものであった（小野寺 1989）。従来の結果を簡単にまとめると魅力的な女性ほど親切、明朗さ、女らしさ、やさしさで高く評価され、反面魅力的ではない女性は、自信や積極性、意志の強さにおいて高い評定を得る傾向があることがわかっている。

この他に魅力判断を測定するために「美しさ」について判断を求めた。この項目は人物刺激の魅力操作の妥当性を見ると同時に、魅力評価の個人差の基となる変数でもあった。

結 果

まず、魅力操作が妥当であったか否かを検討してみる。「美しさ」項目に関する高魅力人物刺激3枚の合計点は14.10 (2.69)、低魅力人物刺激3枚の合計点は6.74 (2.52) であった（カッコ内は標準偏差：7段階尺度による評定を各3枚合計している）。対応のある t 検定の結果は0.01%水準で有意な差が見られた（ $t=44.58$ 、 $DF=367$ ）。従って、魅力の操作は成功したと言える。

「美しさ」の項目に対して高魅力人物刺激と低魅力人物刺激の評定に大きな差がある個人とない個人をグループ分けした。具体的には高魅力人物刺激3枚の美しさの合計と低魅力人物刺激3枚の美しさの合計を求め、両者の差の絶対値を求めた。この値が平均値から0.5標準偏差よりも大きい群を高魅力反応差群、平均から0.5標準偏差よりも小さい群を低魅力反応差群、平均を挟んで-0.5標準偏差以上、+0.5標準偏差以下の中間を中魅力反応差群とした。高魅力反応差群は美しさに関してより敏感に個人を識別する

傾向があると言える。一方、低魅力反応差群は、相手の外見の魅力にあまり影響を強く受けないグループと見なせよう。中魅力反応差群はその中間である。この三群を個人差要因として、フェミニズム尺度の四つの観点、および性格特性に関する分散分析を行った。

結果はフェミニズム尺度では「結婚観」に関して有意な差が見られた ($F(2/365) = 4.0058$, $p < .0019$)。他の3つの観点には有意な差が見られなかった。Table 1は結婚観における平均値を示している。

Tukeyの下位検定の結果、低反応群と高反応群の間に5%水準で有意な差が認められた。

次に性格特性に関して分析を行った。各性格項目についても三枚の高魅力刺激人物の合計と低魅力刺激人物の合計を求め、その差の絶対値を分析対象の得点とした。こうして例えば、「親切さ」の分析得点が高い個人は、魅力的な女性をより親切と認知し、魅力がない女性はより不親切と認知する傾向が強いことになる。一方、分析得点が高い個人は相手の外見的な魅力がどうであれ、それにより相手の親切さの認知に影響をうけない傾向が強いことになる。

フェミニズム項目の分析の場合と同様に高魅力反応差群、中魅力反応差群、低魅力反応差群の三群を個人差要因とし、分散分析を行った。Table 2は性格特性についての平均値と検定結果である。

Table 1

各魅力反応差群の結婚観尺度の平均値

低反応差群	中反応差群	高反応差群
10.61	10.05	9.96
(1.68)	(1.85)	(2.05)
n=109	n=125	n=134

(高得点ほどフェミニズム得点が高いことを示す。括弧内は標準偏差)

Table 2

各魅力反応差群の性格特性判断尺度の平均値

	低反応差群	中反応差群	高反応差群	有意水準
親切さ	1.94	2.38	2.70	$p < .001$
自信	2.75	3.14	3.91	$p < .001$
積極性	2.25	2.66	3.07	$p < .013$
明朗さ	2.40	3.00	3.71	$p < .001$
意志の強さ	2.13	2.74	2.95	$p < .015$
女らしさ	2.86	4.12	5.40	$p < .001$
やさしさ	2.12	2.43	2.83	$p < .029$

*はTukeyの下位検定により $p < .05$ で有意な差があったことを示す。

7つの性格特性項目すべてで有意な差が見られ、かつ平均値は低魅力反応差群から高魅力反応差群にいくほど大きくなっていった。

考 察

フェミニズム得点と美人認知の個人差に仮定されたほど関連が見られなかった。唯一、有意差が認められたのは結婚観に関する項目群のみであった。低魅力反応差群の被験者は結婚観に関してよりフェミニズム的傾向が強く、高魅力反応差群の被験者はその傾向が低かった。この傾向は仮定された通りの方向であり、他者の身体的魅力にあまり重きを置かない個人はよりフェミニズム傾向が高いことを示している。しかしながら、他のフェミニズム観点に有意な差がみられないので、フェミニズム傾向は身体的魅力認知とそれほど強く関連するものではないのかもしれない。あるいは自己の容貌への満足感や自己評価にかかわる性格特性のような変数の方がより他者の身体的魅力認知にかかわる個人差要因であったのかもしれない。

次に性格特性の分析結果であるが、人の美しさに大きな幅を持った認知をする被験者は他の性格特性でも一貫して幅のある認知をすることが示された。従来の研究で示されている美人ステレオタイプによれば美しい人ほど性格もよいと見なされる傾向があるので、高魅力刺激人物をより美しく認知した個人が他の性格特性においても高魅力人物を高く評価し、低魅力刺激人物は低く評価したと考えれば当たり前の結果のようにも思われる。しかし、ここでの個人差分類の基準変数が「美しさ」であったことに注意する必要がある。美しいと感じたからその人物をより性格が好ましいと認知したのか、あるいは性格が好ましいと認知したからより美しいと感じたのか、あるいはその両方なのかという3つの可能性があるからである。ともあれ、一貫して他者認知に大きな幅をもった判断、言い替えば極端な判断をする個人と、あまり極端な判断をしない個人がおり、その傾向は美しさを含めたすべての項目に当てはまることがわかっ

た。この個人差傾向は今後の研究で新たな変数として吟味していく価値があると思われる。

文 献

- 小野寺孝義 1989 美人タイプと美人ステレオタイプに関する研究
東海女子短期大学紀要、第15号、pp.113-122.
- Takayoshi Onodera and Masaki Miura 1990
Physical attractiveness and its halo effects on a partner:
"Radiating beauty" in Japan also?
Japanese Psychological Research, Vol.32,
No.3, pp.148-153.
- 小野寺孝義 三浦正樹 1992 身体的魅力ステレオタイプの個人差研究
日本心理学会56回大会発表論文集、p.242.
- 鈴木淳子 1987 フェミニズム・スケールの作成と信頼性・妥当性の検討、社会心理学研究 第2巻 第2号、pp.45-54.

—児童教育学科 初等教育 心理学—

ABSTRACT

Previous studies have showed the existence of physical attractiveness phenomena. However, the examine of individual differences for perceiving attractiveness is not enough. In this study, we hypothesized that individual differences for perceiving attractiveness would relate with the personal belief, that is, the sympathy for feminism.

The relationship between the feminism scale of Suzuki(1987) and the individual differences for the perception to attractive-unattractive person was investigated. Our hypothesis was not fully supported. However, it is indicated that there is an idiosyncratic difference for perceiving other appearances and sufferableness to the attractiveness stereotype.